

経営者は想いを語る



株式会社 廣貫堂

代表取締役 塩井 保彦氏



信 たかしん

理事長 谷内 雅彦氏



～富山の歴史と共にあゆむ廣貫堂～

当社は明治9年9月に創業しましたが、事業立ち上げの背景は江戸時代まで遡ります。富山藩は農業や漁業を主軸産業としておりましたが、急流河川による洪水や豪雪地帯という土地柄から、この2つの産業だけでは地域経営が困難な状態でした。そのため、2代目藩主の前田正甫公（以下、前田公とする）は農業や漁業以外の新しい産業を興しました。それが「菓産業」であり、「菓の富山」の始まりとなったのです。

前田公は「菓産業」を興すにあたり、「反魂丹役所」を創設しました。この役所では漢方薬や蘭学などの西洋医学の博士を呼び、病気に効く菓の製造方法を研究させ、それに伴い原料調達や処方箋の作成、製造器具の開発などを行いました。また、一方では藩民への菓の製造方法や販売方法の指導を行い、菓産業の発展に幅広く寄与しました。前田公の言葉で「先用後利」の理念に基づき、先に菓の効果を知って頂き、顧客の信用を得てから対価を頂くという配置菓の販売方法を指導したのです。この販売方法は鎖国時代において、国内の情報も円滑に回っていなかった日本にとって伝達産業にもなり、長く重宝されました。

明治になり富山の菓産業を発展させてきた役所も、廃藩置県によりなくなります。その際、勘定奉行であった郡丞哉氏が役所の役割を引き

継ぎ、企業化したのが「廣貫堂」です。この企業名は、富山の菓産業の基盤をつくった「反魂丹役所」の創設者前田公が残した「医療の仁恵に浴せざる、寒村僻地にまで広く救療の志を貫通せよ」という訓示の「広く救療の志を貫く」という部分が由来となっています。当社が創業132年を迎えることが出来たのは、このように江戸時代から凄まじく荒れた富山の地に新しい産業を興そうという前田公の明確なビジョンと実際に菓産業を発展させてきたスピリットをしっかりと受け継いできたためだと考えています。

～「世界の菓都、富山」を目指して～

現在、日本は医薬品を製造している国の中で世界第2位の生産量を誇り、その市場占有率は約8%となっています。そして、富山県は菓事法の改正もあり、生産額が全国第4位の地域となりました。その影響から今年1年間で新たな設備投資を発表した企業が増えており、当社も例外ではなく羽羽に新工場を計画中です。設備投資は総額で約400億円強と言われており、その規模から今以上に富山県が生産額が増えることが予想されます。数年後には富山県が日本最大の医薬品製造地域となる可能性もあります。これも富山県が江戸時代という古くから菓産業を育成してきた結果だと思えます。

今後は生産額の増加に伴い、海外

に輸出される比率も高まることが予想されています。これは当社の訓示であります「広く救療の志を貫く」に対して、更に広く「世界」に向けた志が実現される「世界の菓都、富山」に向けた躍進と言えるでしょう。

そのような中、今後はより確実に「世界の菓都、富山」に向けて、2つのキーワードの基に進んでいく必要があると考えています。1つ目は、グローバルに対応出来るよう製品を充実させていくことです。菓は使用される国によって菓事法が違い輸出するためにはその国の菓事法に基づき製造基準を合わせなければいけません。そのため、産学連携で世界の国々の製造基準に対応出来る技術と製剤技術をしっかりと構築していかなければならないと考えています。

2つ目は機能性食品の開発です。最近は日々食べる食品でいかに病気を予防するかに関心が高まっています。富山県も菓だけでなく特色ある機能性食品を開発し、商品化していく必要があります。世界の人々の役に立つ多種多様な製品とするために富山県立大学の生物工学科のようなバイオテクノロジーを研究している機関ともタイアップしていかなければならないと考えています。既に、現在も共同研究を行っていますが、産学連携から「世界の菓都、富山」を目指し、より活動を精力的に行っていきたいと考えております。

～創業時の思い～

高岡信用金庫は大正12年に創設されました。当時は第1次世界大戦の終戦直後という不景気な社会情勢にあり、富山県も例外ではありませんでした。特に高岡市では対岸貿易が盛んであったため、戦前の債権が回収出来ない事態となり、企業への融資が出来ない厳しい状況となりました。このような状況下、当時高岡にあった銀行と商工会議所などの経済界が協力し、「何とか地域企業を支えなければいけない」という思いから信用組合を作ったのが始まりです。この思いは現在も変わることなく生きていると思います。

～産学連携と金融機関の役割～

現在、富山の中小企業はグローバル化に伴った大手企業の海外への生産拠点移転や財政不況により、仕事量が減少傾向にあります。これらは「高齢化」や「東京一極集中」といった地域問題もあって、地域格差の要因となっています。

このような社会背景から、企業のあるべき姿も変化しています。今後求められるのは、様々な企業や大学との連携から、幅広いフィールドにおいて独自の可能性を見出し、「分散型企業」です。反対の「ピラミッド型企業」では、グローバル化による大手企業の海外への生産拠点移転の影響を受けやすく、独自の技術や商品がないため、海外も含めた

競争に打ち勝っていくことは困難だと言えます。

そのため、現在の経済環境や企業には産学連携が必要であると考えています。企業と大学、どちらか一方の発想では可能性は限られますが、互いの発想や情報を活かし合えば新しい可能性が出てきます。これは海外も含めた強い競争力へと発展していくことが考えられます。

この中で、私たち金融機関も大切な役割を担っています。1つ目は経済環境に応じて、新分野への事業転換や新商品展開をご支援していくことです。実際、これを実現させるには費用も期間もかかり、金融機関がこれを支えていく必要があります。

2つ目に企業再生です。中小零細企業には生産管理や収益管理などの「管理体制」には改善すべき点があります。私たちは管理体制の改善点を発見しやすく、その改善ご支援をしています。もちろん専門性の高いことも出てくるため、その場合はコンサルタントの先生や大学の先生をご紹介するといった産学連携の窓口的な役割も担っております。

3つ目に新しいビジネスの可能性を見出し、その仕組みを作ることで。例えば、環境が大きく取り立たされる中、そこから「資源」となる可能性を見つけ、ビジネスになるように仕掛けていかなければいけません。このように新しいビジネスチャ

ンス発掘の役割も担っているのです。

～今求められる人材とその育成～

変化しているのは企業ばかりではありません。求められる人材も「感動を与えられる人材」へと変化してきています。その例として、ホテルリッツカールトンの「11万円のオムレツ」を考案したシェフが挙げられます。このサービスは高級レストランで1組限定ランチを提供しています。バイオリンの生演奏やシェフやソムリエがつきっきりでサービスをするため、映画の中のような世界が提供されます。「感動」あるサービスとして、開始以来の人気メニューです。「11万円のオムレツ」が人気メニューであることから、消費者には「感動」を求める必要があります。従来までの「提案型」のサービスだけでは顧客満足段階としては標準ラインであり、ベストラインまでは満たしていません。今後は、企業において「感動を生む」熱意ある人材をどう増やしていけるかが、企業の飛躍に大きく関係してくるものと考えております。

Company Profile

住所（本社）：富山県富山市海沢町2丁目9-1

URL：http://www.koukandou.co.jp

創立：明治9年（1876年）9月

事業内容：医薬品

- 医薬部外品
- 医療用具、化粧品
- 清涼飲料
- 健康食品の製造販売



住所（本店）：富山県高岡市守山町68番地

URL：http://www.shinkin.co.jp/takaoka/

創立：大正12年3月

事業内容：信用金庫法に基づく金融業